

第III章

霊域を観光資源化する同窓会



本章では、ひめゆり同窓会によるひめゆり平和祈念資料館の設立とその後の運営に関わる活動を振り返り、霊域の観光資源化について検討しようとする。なお、本章は、「非営利組織の経営に関する文化人類学的研究」を主題とした拙論（吉田 2019a）を、周縁観光論の観点から改稿し、コロナ禍中の若干の民族誌データを補足したものである。

第1節 戦後のひめゆりについて語ること

本節では、章の導入として、議論の主題とその背景にある視座について述べておく。

前章では、いささか特異な世界自然遺産の事例を取り上げ、世界遺産地域の内と外とを分かち境界の偶有性に着目した。空間的な差異（と類似性）の中で観光地化や観光資源化を捉えようとした前章にたいし、本章では、時間的な差異の中で観光地化や観光資源化を捉えようとする。すなわち、観光から遠ざけられていた「霊域」たるひめゆりの塔の所在場所を、ときの経過とともに観光地化していくことになった、その過程とそこに内在する論理を、記述し理解しようとするのである。

まず、経緯の概略を確認しておこう。戦後間もない1946年、沖縄県糸満市の伊原第三外科壕と呼ばれるガマ（洞窟）の脇にひめゆりの塔が建立された。そして、そこに集う者たちを中心に、1948年にひめゆり同窓会が結成された。ひめゆり学徒隊の悲劇に関する口コミ情報、そして小説や映画を介した情報が社会に広まる中で、この場所は沖縄内外から人々が訪れる事実上の観光地となっていった。同窓会は、学徒隊員となった戦時の在学学生の多数が亡くなったこの塔とガマのある場所を、墓に相当する「霊域」と認識し、物見遊山でやって来る人々とそのまなざしから守ろうとした。しかし、その後、同窓会は、この場所に恒久平和を念願する資料館を建設し¹、亡くなった学友を忘れず、戦争の悲惨さを広く人々に伝えようと決意するにいたった。そして1989年の資料館開館により、この場所は沖縄島南部の主要な観光スポットとしてさらにゆるぎない地位を確立していった。

観光推進や観光地化を自明視する観点からは、そうした経緯に特段の疑問は感じられないかもしれない。しかし、霊域という宗教的なもの（cf. 吉田 2020a: 11-13, 295-301）への配慮を重視する観点からは、資料館の建設と観光者の受け入れは、観光に供されるべきでない霊域を観光に供することであると、否定的に捉えられる可能性はあるであろう。事実、資料館の開館当時、そうした評価は遺族からも聞かれ、新聞投書欄などでも散見された。では、同窓会側の相互主観的な意味に即した場合、その行動はいかに捉えられるのか。当地における部外者の来訪を押しとどめようとしていた同窓会は、にもかかわらず、なにゆえ観光施設たる資料館の建設へと舵を切り、観光者を積極的に迎えるホスト的存在となったのか。本章では、当初観光の外部においていた「霊域」を観光の内部に取り込み観光資源化したと称する同窓会の営みを、戦後の数十年間にあった出来事の不連続な連鎖——予期せぬ事態や意図せざる結果が偶発的に継起する——に照らしつつ、当事者の価値観に即して、記述しようとする。このように、霊域という観光の周縁あるいはむしろ外部の観光内部化を、時間経過の中で捉え考察することが、本章の主題である。

また、本章は、その記述により、戦後のひめゆり学徒隊生存者の社会的営みをあらためて整理す

¹ ひめゆり平和祈念資料館の運営規則の第2条は、設置の趣旨についての条項であり（第1条は規則の趣旨についての条項）、「恒久平和を念願するため、ひめゆり平和祈念資料館を設置する」とある（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 307）。

ることを、もうひとつの主題としている。ひめゆり学徒隊については²、これまで文学・映画・舞台などのおおくの作品において取り上げられ、沖縄戦史に関する諸文献においてもかならずといていほど言及されてきた。また、その歴史的事実や戦後に形成された言説が、殉国美談の神話となって、日本・沖縄の人々のエートスに訴えかけ広く人口に膾炙することとなったという、イメージの社会分析についても、いくつかの先行研究はある (ex. 石野 2015(1950); 川村 2016: 35-44; 北村 2009; 仲田 2005, 2008; 仲程 2012; 仲宗根 1951, 1983, 2002; 岡本恵 2007(1969); 山田潤 2010)。しかし、ひめゆり学徒隊の生存者たち——社会学や歴史学では、事故や災難に遭遇し生き残った人々をサバイバーや生き残りなどと表現するが、本章では「生存者」という表現をおもにもちいる——や、彼女らの先輩であった同窓生たちが、戦後約80年の間にいかなる活動を展開したかを考察した人類学や社会学の先行研究は、管見のかぎりほとんどない。ひめゆり同窓会や資料館が自らの諸活動を振り返って整理する著作をいくつも出版しているため、戦後のひめゆりの足跡はそれで十分わかる、という捉え方もあるであろうが、ここでは、そうした彼女たち自身の語りや活動の文脈を明らかにしつつ、戦後のひめゆりについて、観光論との接続をはかる視点から社会分析を行おうとするのである³ (cf. 吉田 2020a: 303-357)。

次に、本章の議論の背景にある視座に触れておきたい。それは、アガンベンのホモ・サケル論であり、中でも『アウシュヴィッツの残りのもの』に凝縮される論点である。アガンベンは、収容所内のガス室に入る前にすでに生ける屍となった「ムーゼルマン」(ムスリム)と呼ばれていた者たちこそ、アウシュヴィッツの悲劇の完全な証人であって、生き残って実際に証言した人々はムーゼルマンの代弁者にすぎない、というプリーモ・レーヴィの主張に寄り添いつつ、これをフーコーの生政治・生権力論と結びつけ、語りえないものを語りえなかった人々の言語活動と代弁者として語った生き残りの人々——レーヴィもまたそのひとりであった——、あるいは広くアウシュヴィッツ後に生きる人々の言語活動のつながりが、20世紀の生政治により分断される中で、それら言語活動の潜勢態と顕在態を含む総体のはざまに、あるいは、アガンベンの表現ではないが、それらの共振に、なお残る人間の倫理の可能性について論じた (Agamben 2001(1998), 2003(1995), 2009(1982); Levi 2014(2000/1986), 2017(1976/1947))。私は、こうしたアガンベンの議論を、地上戦によりおおくの人々が亡くなり、その後の米軍占領下で基地機能が強化され、復帰後も基地存続の中で意志選択を分断され、いまなお「戦後ゼロ年」(目取真 2006)の状態におかれているといえる沖縄島地域の人々の過去と現在の生に重ねて理解している。そして、生き残ることなく語ることなく戦争で亡くなった人々の語りえない証言を受託されて代弁する機関として、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄

2 今日では「ひめゆり学徒隊」という表記が頻用されるが、「学徒隊」や「看護隊」そして「ひめゆり」というひらがな表記は戦後の語用であって、沖縄戦時のものではない(公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編)2008: 25, 212)。本章では、戦前・戦中については「姫百合」という表記をもちい、ただ学徒隊については「ひめゆり学徒隊」という表記を一貫してもちいることにする。

3 戦後のひめゆり同窓会に関する社会分析はかならずしも十分なものではない。たとえば、岡本は、ひめゆり学徒隊生存者の手記の中に戦争への疑念や批判が存在しないことを批判的に取り上げ、それを、戦争責任の意識を欠落させてしまった戦後の沖縄の人々の意識に通じるものであると論じた。大城は、戦後の沖縄の教職員に戦前の師範教育の影響が残っていると批判した。ひめゆり平和祈念資料館建設時の総合プロデューサーは、少女たちが「軍国少女」に仕立てられていった経緯を示すこと、殉国美談にすり替えられない、戦争の実相を語り継ぎ告発することこそ、この資料館の目標であると認識していた。この点で、当該資料館は、軍国少女を生産した戦前の国の教育政策を批判し、学徒隊がそれに無批判にしたがったことを反省する立場にある。ただ、一方で、学徒隊生存者の大半は戦後教職にあった者たちであり、彼女たちが戦後の沖縄の教育にいかなるスタンスで向かい合っていたのかは十分明確でない(福間 2014: 196-198, 204-207; ひめゆり平和祈念資料館(編)2000: 45-46; 岡本恵 2007(1969): 32; 沖縄大学地域研究所(編)2012: 100-101; 大城 2002a(1968): 120-121; 櫻澤 2012; cf. 大城 2002b(1972): 312)。本章の議論は、その種の社会分析にまで踏み込むものではないが、これらを含めた総括は今後の課題として残されていると考える。

県平和祈念資料館、石垣島にあるその分館（八重山平和祈念館）、対馬丸記念館などがある、と捉えている。本章は、こうした視座の下に戦後のひめゆり同窓会の事業活動の軌跡を整理する。

以下、第2節では資料館建設に踏み出す前のいわば前史について、第3節では1989年6月23日の資料館開館にいたる経緯について、第4節では開館後から今日までの状況について、それぞれ記述する。そして、第5節では、霊域の観光資源化としてさしあたり捉えられるこの過程に内在する主要なポイントをあらためて整理し、議論をまとめる。

第2節 ひとつになった乙姫と白百合

本節では、いったん戦前・戦中にまで遡りつつ、1960年代ころまでの状況を記述するとともに、戦後に設立されたひめゆり同窓会がひめゆりの塔の所在場所を「霊域」と認識していたことを確認する。なお、本章の主題はこの同窓会による資料館建設と運営の把握にあるため、戦時のひめゆり学徒隊に関する記述はごく簡単なものにとどめておく。

戦後のひめゆり同窓会の母体は、「女師」と呼ばれた沖縄師範学校女子部と「一高女」と呼ばれた沖縄県立第一高等女学校の2校の、戦前・戦中の在學生と卒業生である。女師は1896年に首里の師範学校内に設立された女子講習科を、一高女は1900年に設立された私立沖縄高等女学校を、それぞれ前身とする。前者の女子講習科は、1910年に女子本科となり、1915年に沖縄県女子師範学校と改称し、1943年に国立の沖縄師範学校女子部となった。後者の私立沖縄高等女学校は、1903年に沖縄県立高等女学校となり、1928年に沖縄県立第一高等女学校に改称した⁴。ともに県立であった1916年には、財政事情などにより、前者が真和志村（現在は那覇市の一部）の安里にあった後者の校地へと移転し、おなじ校舎の併置校となった。校長も合わせてひとりとなり、一部の教員は両校で教鞭をとった。「女師・一高女」と呼ばれたこの学校は、こうして、いわばふたつにしてひとつとなった。学校のシンボルともなっていた80メートルほどにわたる相思樹の並木をくぐり抜けると、校門の右側には「沖縄師範学校女子部」、左側には「沖縄県立第一高等女学校」の門札が掲げられていた。1921年に制定された徽章（校章）も、女師は左向きの、一高女（当時は高女）は右向きの百合の花をあしらった、対称的なものであった。1927年には、一高女の校友会誌「おとひめ」（1907年創刊）——ただし、ひめゆり同窓会の諸資料では「乙姫」と漢字で表記されることが多い——と女師の学友会誌「白百合」（1912年創刊）を合併させて「姫百合」とし、校友会も合併させた。女子講習科から数えて40年、女師の25周年、私立から数えて一高女の35周年の節目、とされた1935年には、記念式典が挙行され、共通のものとしての同窓会館が、安里の校地のすぐ隣に建てられた。同窓会自体はそれぞれ別の組織であったが、建物が共有であったことが、戦後のひめゆり同窓会の設立へとつながることになる。両校は、合わせて通称「姫百合学園」とも呼ばれていた。一高女の卒業生の中には女師の本科に進む者もいれば東京の大学に進む者などもあり、女師・一高女は、教員を含め沖縄をリードしていく女性を排出するエリート校であった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 66, 225; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 9, 38-41; 公

4 女子師範学校（5年課程）は、3年課程の師範学校女子部予科と2年課程の師範学校女子部本科からなる体制であった。この予科と本科は、それぞれ現在の中学3年生～高校2年生と高校3年～大学1年生に相当し、その上に1年課程の師範学校女子部専攻科（旧女子師範学校専攻科）があった。なお、高等女学校は5年課程を基本としたが、1943年から4年課程となり、これは現在の中学1年生～高校1年生に相当した。これを修了すれば、師範学校女子部本科に進むことができた。ひめゆり学徒隊は、女師の予科から本科そして一高女の各学年の在學生から構成された（ひめゆり同窓会相思樹会（編）1998; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 17-18）。



写真3-1 1933～4年ころの相思樹並木



写真3-2 女師（右）と一高女（左）の門札

（財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 8, 12）



写真3-3 高女（一高女）と女師の校章

（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）1991: 3）



写真3-4 校友会誌『姫百合』15号

（ひめゆり平和祈念資料館資料委員会2004: 23）



写真3-5 戦前の同窓会館

（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）1991: 70）

益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 40-41; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 7-8, 17-18, 132-139, 2012: 10-11, 2015: 3; 仲程 2012: 184-186, 2021: 8-11, 178-179; 西平 2015(1995/1972): 15-16; 東京ひめゆり同窓会（編）1966, 1975: 7; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 31, 34, 56-68, 104-121, 174, 178, 665-667, 699-700; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）1991: 21, 98, 2004: 2-3, 22-38, 110-111, 246-249）。

1944年7月、女師・一高女の校舎の一部は軍に接収された。十・十空襲と呼ばれる同年10月10日の大空襲により、那覇市街地は焦土と化した。学校周辺にあまり被害はなかったが、授業はほとんどできなくなった。1945年1月には空襲によって校舎が焼失し、4名の生徒が生き埋めになった。

表3-1 沖縄島地域の女子学徒隊とその戦死者数

学校名	戦後の通称	学徒動員数	学徒戦死者数	戦死者数合計
沖縄師範学校女子部	ひめゆり学徒隊	157	81	生徒 211
県立第一高等女学校		65	42	教師 16
県立第二高等女学校	白梅学徒隊	46	17	生徒 58 教師 8
県立第三高等女学校	なごらん学徒隊	10	1	生徒 2 教師 0
県立首里高等女学校	瑞泉学徒隊	61	33	生徒 55 教師 0
沖縄積徳高等女学校	積徳学徒隊	25	4	生徒 28 教師 5
昭和高等女学校	梯梧学徒隊	17	9	生徒 58 教師 4

(公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編) 2008: 8) より作成

女師・一高女の生徒たちはこの1月から勤労に動員され、看護教育を受けた（なお、一部の生徒は前年秋ころから看護教育を受けていた）。3月には、この看護教育を受けた生徒222名および引率教員18名の計240名からなるひめゆり学徒隊が結成され、沖縄陸軍病院に看護要員として動員された。この陸軍病院は、第32軍——連合軍上陸に備えて3月に編成され、首里城地下に掘った壕を司令部とした——直轄の病院であり、南風原の丘に掘りめぐらされた多数の横穴壕を中心とし、糸満の伊原第一外科壕（アブチラガマ）や伊原第三外科壕を含めて各地に分室を抱えていた。米軍を中心とした連合軍は、4月1日に読谷村海岸から沖縄島に上陸した。戦線が拡大し負傷兵が増加する中、ひめゆり学徒隊員は、分室を含む沖縄陸軍病院の看護要員として働いた。そうした中、6月18日夜、突如学徒隊に解散命令が出た。軍は生徒たちに、これからは自分の判断で行動せよ、と命じたのである。敵が迫る中、放り出されたかたちの生徒と引率教員は移動をはじめたが、倒れる者、砲弾で死ぬ者、自死する者も出た。解散命令前の90日間における学徒隊の死者は19名であったが、解散命令後の数日間における死者は117人となった。結果的に、動員された学徒222名中123名（女師81名、一高女42名）、引率教員18名中13名が戦死した。女子学徒隊の中でもっとも死者をおおき出したのがひめゆり学徒隊、とくに女師出身者であった。女師・一高女は、校舎を焼失したまま廃校となった。生き残ったひめゆり学徒隊のメンバーも散り散りになった（ひめゆり平和祈念資料館(編) 1989: 24; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 76, 89; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編) 2008: 8, 30-34, 133-143, 204, 2012: 13-14; 仲程 2021: 139-142; 西平 2015(1995/1972); 琉球新報社編集局(編) 2022: 18-23; 青春を語る会(編) 2006; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会(編) 1987: 733; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編) 2004: 22-43, 95, 143-147; 吉田 2020a: 310-315)。

1946年1月、具志川村（現うるま市）で沖縄文教学校が開学した。収容所生活を送っていたひめゆり学徒隊の生存者のおおきは、戦後初の教員養成機関であるこの学校に入った。彼女たちは、そこで再会を果たし、友人の消息を知ることにもできた。沖縄文教学校の1期生は、2ヶ月間の修業だけで教員免許を与えられた。4月には初等学校令が公布され、当時の沖縄民政府文教部の下で教育行政が再開された（当初の学校制度は8・4制、1948年4月からは6・3・3制）。沖縄戦下で学校を修了できなかったひめゆり学徒隊の生存者たちも、教員となって戦後の沖縄教育を支えるようになった。のちにひめゆり平和祈念資料館の運営を担う中心メンバーとなるのは、彼女たち教職経



写真3-6 沖縄文教学校
(那覇市文化局歴史資料室(編)1996:124)

験者であった⁵ (ひめゆり平和祈念資料館(編)2000:1-3, 2010:66, 225; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編)2012:16, 302; 櫻澤2015:11)。

女師・一高女の学徒と教員の殉死者を合祀する慰霊碑「ひめゆりの塔」が伊原第三外科壕の上に建立されたのは、1946年4月7日であった。「ひめゆり」というひらがな表記は、この塔に由来し、その後社会に定着していったものである。建立したのは、戦後初の慰霊碑「魂魄之塔」を建てた真和志村民であった。当時の真和志村長は、ひめゆり学徒隊の遺族でもあった。米軍のガス攻撃によってこのガマでは数十名のひめゆり学徒隊員が亡くなっていた。遺体はすでにドラム缶で焼かれており、遺品も散乱していた。村民は、遺骨・遺髪・遺品を集め、ひめゆり学徒を率いた教員のひとりである仲宗根政善に託し、おおくの遺族に知らせしてほしいと頼んだ。そして、彼らは、糸満高校の生徒数名とともにこのガマの周囲を整えて、(ひめゆりの花はなかったので)テッポウユリを植え、慰霊碑を建て「ひめゆりの塔」と刻んだ。この時点では、ガマの中には残された白骨などがまだ確認できる状態であった。村民と仲宗根らは、簡素な除幕式と慰霊祭を行った。米軍の手前、慰霊祭ということを公にはしにくかったので、清掃を目的とする行為であるとした。この地以外の場所で亡くなったひめゆり学徒を含む約200名を合祀したこの場所には、遺族に加え、地元の人々も訪れるようになった。米軍関係者は、ここをヴァージン・ケイヴなどと呼び、戦跡観光地のひとつとみなした。1947年には学徒隊死亡者の名を刻んだ銘板が塔の脇に建立され、1948年には糸満

5 戦後の沖縄の教員組織について概観しておく。1947年2月に結成された戦後初の教職員組織である沖縄教育連合会は、琉球政府発足とおなじ1952年4月1日に沖縄教職員会へと改組された。この組織は、法律上は労働組合ではなく、公益社団法人であった。政治的党派からの自律を掲げ、幼稚園から大学、事務職員から校長までの全教職員と文教行政関係者を網羅した組織であり、51年6月に組織された沖縄教職員共済会に入るための条件がこの沖縄教職員会会員であったこともあり、教職員のほぼ100%が会員となった。初代の会長は、元女師・一高女の教員であり、当時沖縄群島政府文教部長の職にあつて、のちに最後の行政主席と復帰後初の県知事を務めた屋良朝苗であった。沖縄教職員会は、沖青連(沖縄青年連合会、58年7月から沖縄県青年団協議会と改称)とともに、50年代の沖縄の社会運動を担う両輪となった。教員のおおく——50年代後半では7割以上——は琉球大学出身の若い教員であり、彼らは、米軍支配体制への批判と祖国復帰への思いを共有し、地域と密着して行動した。沖縄教職員会は、祖国復帰運動とともに、戦没者慰霊、援護法の沖縄への適用と対象拡大、沖縄護国神社(1940年創建)の再建などにも積極的に関与した。だが、1965年の佐藤首相来沖縄の立法院選挙以降、革新勢力の支援に傾倒していき、やがて護国神社関連組織との関係も解消した。66年に社大党がベトナム戦争の泥沼化を受けて基地反対の立場を明確に掲げる——それまで、米軍支配下では慎重にならざるをえない論点であった——と、沖縄教職員会はこれを支持し、完全に革新の立場となった。68年に行政主席の公選実施が決まり、屋良は当選した。ただし、行政主席としての屋良と、基地撤去・日本復帰をもとめる沖縄教職員会および復帰協(沖縄県祖国復帰協議会)の間には溝が生まれた。その後、69年の佐藤・ニクソン会談で72年返還が決定すると、復帰協や沖縄教職員会の社会運動における役割も低下していった。71年9月に、沖縄教職員会は労組である沖縄県教職員組合へと移行し、74年4月には日教組に正式加盟した(新崎2016:58-69; ひめゆり平和祈念資料館(編)2000:21; 森2016:149-153; 櫻澤2012:65-129, 193-251, 2015:43-46, 84-87, 112-114, 127-145, 179-180; 戸邊2008:158; 山里2010:211-212)。



写真3-7 ひめゆりの塔と名を刻んだ銘板 (1947年)
(財団法人沖縄県女師・一高女同窓会 (編) 1987: 5)



写真3-8 納骨堂と十字架
(沖縄タイムス社 (編) 1993 (1950): 巻頭)

教会牧師と沖縄基督青年会によって十字架付きの納骨堂が建立されて、伊原第一外科壕や荒崎海岸などで収集した遺骨も含めて納められた。今日、ここには沖縄戦で死亡したひめゆり学徒隊の生徒・教員計227名が合祀されている (普天間 2015; 南風原町史編集委員会 (編) 2004 (1999): 42-47; ひめゆり平和祈念資料館 (編) 2000; 北村 2009: 137-138; 小林 2010: 121-125; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館 (編) 2012: 17-18; 仲田 2008; 仲程 2012; 仲宗根 1983: 127-128; 沖縄タイムス社 (編) 1998: 25; 琉球政府 (編) 1989 (1971): 917; 吉浜 2017: 234-237; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会 (編) 2004: 78-81, 95-101)。

ひめゆり学徒隊生存者は、たがいに、また上級生や恩師たちとも、連絡を取り合うようになった。1948年4月には女師・一高女の同窓会が合体され、戦前の校友会誌の名にちなんで「ひめゆり同窓会」と名づけられた。廃校後の女師・一高女の元学徒・卒業生たちは、ここにあらためて再組織化されたのである。1940年に発足し休止していた同窓会東京支部も、1949年に「東京ひめゆり同窓会」として再発足した (のちに、内地では大阪、福岡、熊本、宮崎、鹿児島に、沖縄では北部、中部、知念、糸満、八重山に、同窓会支部が結成された)。東京支部——2010年時点でも、会員は200名ほどいた——には、姻戚関係等を含めて各界の有力者につながるネットワークをもつ者もいた。東京支部の有力メンバーは、しばしば沖縄に戻り、同窓会本部と連携しつつ、学校再建という悲願の実現について意見交換するようになった。当然ながら、このころの同窓会の中心メンバーは学徒隊生存者よりもはるか上の世代であり、彼女たち生存者はもっとも若い、最後の世代であった (ひめゆり同窓会東京支部 (編) 1995: 10; ひめゆり平和祈念資料館 (編) 2010: 119, 225; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 152, 139-147; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館 (編) 2014: 41; 東京ひめゆり同窓会 (編) 1966: 1; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会 (編) 1987: 673-676; cf. 女師・一高女ひめゆり同窓会中部支部 (編) 1999; <https://mainichi.jp/articles/20220423/ddm/041/040/071000c>)。

同窓会が結成されたころ、ひめゆりの塔は地元の人々が訪れる名所になっていた⁶。塔の周囲には店や売りが並び、およそ慰霊の地としてはふさわしくない、ある種の賑わいや猥雑な雰囲気も醸

6 このころ、米軍収容所で回し読みされた写本や口コミによって、ひめゆりの塔に関する情報が広まっていた。その後、1949年に文芸誌に連載された「ひめゆりの塔」という小説が社会に影響を与えた。著者は、沖縄戦経験者ではない内地在住者であったが、近親のメモや記憶をもとに、カナという架空の女性を主人公にし、ひめゆり学徒隊が経験した沖縄戦を描いた。この小説「ひめゆりの塔」は、沖縄戦あるいは戦争の悲惨さを、内地の人々のみならず沖縄の人々にも訴えるものとなった (福間 2011: 103-117; 石野 2015 (1950); 川村 2016: 35-44; 宮永 1982 (1949): 224-241; 森 2016: 41; 櫻澤 2015: 35-37; 山田潤 2010)。

し出すようになった。慰霊のためにこの場所を訪れる遺族の中には、ガマの中に勝手に入るアメリカ人や沖縄の人々を見て、死んだ娘の墓を踏み荒していると落泪する者もいた。こうした状況を見かねた日系二世の篤志家が、1951年5月に友人とともに集めた寄付金をひめゆり同窓会に贈り、関係者の尽力によって、ひめゆりの塔の立つ土地を地主から買い取ることができなかった。この年の3月には、真和志村民が、ひめゆり学徒隊の死者全員の御霊をひとつのおおきな位牌（トートローマー）にまとめ、真和志村にある寺院を菩提寺として安置した。こうして、ひめゆり学徒の死者祭祀にもひとつの区切りがついた。この1951年は仲宗根政善の手記が東京で出版された年でもある。体験にもとづくこの手記は、小説「ひめゆりの塔」（石野 2015(1950)）以上の反響を呼び、出版直後からその映画化が検討された。サンフランシスコ講和条約の発効後に映画化は実現し、1953年1月に日本と沖縄でほぼ同時に封切られた。この映画「ひめゆりの塔」は600万人を動員し、興行収入1億8000万円と、当時の記録を更新する大ヒット作品となった。これにより、「ひめゆり」は殉国美談の象徴的名辞としての不動の地位を獲得し、ひめゆりの塔とその所在場所は慰霊観光の主要かつ突出した訪問地となった。ただし、学徒隊生存者にとって、ひとり歩きする殉国美談のイメージや、フィクションとはいえ当時を想起させる映像は、むしろ不快なものであった。彼女たちは、殉国美談に還元できない戦争の悲惨さをかみしめ、自分が生き残ってしまったことにたいする謝罪の念を強くした（福間 2011: 103-117; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 2-4, 8-9; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 41; 北村 2009: 137-153; 小林 2010: 172-177; Molasky 2018(1999): 28-32; 仲田 2005; 仲宗根 1951; 櫻澤 2010: 22, 2015: 72-73; 吉田 2020a: 328-332; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 80）。

ひめゆりの塔では、6月の慰霊の日に慰霊祭を行うようになり、1951年の7回忌ころからこの慰霊祭に参加する同窓生も増えていった。1957年の13回忌には、旧真和志村民が建てたひめゆりの塔の側に、白いおおきなコンクリートのひめゆりの塔を建てた。1960年には、同窓会を「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」——以下、「財団法人ひめゆり同窓会」と略記する——として届け出て、これが認可された。旧同窓会館跡地の登記の必要上からであった⁷。1963年には、ひめゆりの塔とガマの周辺を柵で囲った。塔によじ登ったりガマに入ったりして霊域を荒らす者がお



写真3-9 現在のひめゆりの塔

写真3-8の十字架の下、写真3-9の右手の小さな石碑が、写真3-7にある1946年4月建立の最初の慰霊碑である。白い慰霊塔は、ひめゆり平和祈念資料館20周年に当たる2009年に建て替えられたものである。現在の「ひめゆりの塔」は、写真3-9にある複数の碑から成る集合体であると考えられる。

7 戦後、不在地主の土地は市町村の管理下にあった。同窓会館の跡地を管理していた旧真和志村（1953年10月に真和志市、1957年12月に那覇市に編入合併）は、そこがひめゆり同窓会の土地であることを認めたが、周辺を市場（のちの栄町市場）とした。同窓会側は会館跡地の返還をもとめたが、代替地を提供されるにとどまった。この代替地は、婦人団体連合会からの申し入れを受けて譲渡した。1966年に市場で火事があり、たまたま戦前の同窓会館跡地の建物が焼失したことを受け、市との交渉の結果、その場所が条件付きで同窓会に返還されることになった。その条件とは、建物の一部を貸店舗とし、火事のときまでそこにあった店舗を優先的に入居させることであった。こうして、1968年に3階建ての同窓会館が再建された。それまでの同窓会は、拠点をもたず、歴代の同窓会長宅を事務局としていた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 18-20; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 667-671）。

り、これでは亡くなった生徒たちがかわいそうだという声と同窓会の中で起こったからであった。また、この年、同窓会と遺族会——「ひめゆり遺族会」——が費用を折半し、伊原第一外科壕の跡地を購入した（この土地は、1994年に同窓会単独での所有地として保存登記された）。1966年6月には、慰霊祭を重ねる中で旧交を深めた1944年・45年時の在校生、つまり女師・一高女を卒業できずに終戦と廃校を迎えた学徒隊生存者たちが、ひめゆり同窓会相思樹会——第1回の会合の際には「生存者の会」であったが、この会合で相思樹会と命名された——を結成した（相思樹会は、同窓会メンバーの高齢化もあり、1994年にひめゆり同窓会に一本化し、解散した）。1968年に再建された同窓会館は同窓生たちの活動の拠点となり、貸店舗からの収入は同窓会の運営費に充てられた（ひめゆり同窓会相思樹会（編）1998: 365-366, 383-384; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 18-20, 2010: 119; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 148, 152; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 41; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2015: 3; 仲宗根 2002: 139-141; 与那覇 2011; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 80-85, 112-114, 126-131, 158-173）。

これら一連の出来事があった1960年代、ひめゆりの塔は、慰霊の場所というよりもむしろ、増えつづける観光客が訪れ短時間で去っていく観光スポットとなっていた。1960年代は、沖縄が慰霊観光地から亜熱帯の楽園観光地へと転換していく過渡期でもあった。1967年に沖縄入域旅客数は10万人をこえ、復帰の年の1972年には44万人をこえた。ひめゆりの塔周辺は、沖縄島の地上戦終結直後から観光地の様相を帯びた場所であったが、復帰後にその色合いはさらに強まっていったのである（吉田 2020a: 327-344）。

これに関連して、第1節で触れていた点をここで確認しておきたい。この1960年代までの同窓会（および遺族会）が、ひめゆりの塔やガマのあるこの場所を、死者が眠る墓に相当する霊域とみなし、物見遊山的な観光者のまなざしから守ろうとしてきた、という点である。ひめゆりの塔の周囲には、「赤心の塔」（1948年）、「女神の像」（1951年）、「乙女像」（1952年、1956年に台風で倒壊）、「ひめゆり像」（1956年）、旧琉球王家子孫の歌碑（1959年）、「いはまくらの碑」（1990年）、千羽鶴献納堂（1991年）、敷地購入に貢献した日系二世の篤志家の顕彰碑（1997年）など、いくつものモニュメントが寄贈されたり新たに建立されたりした（普天間 2015: 10; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 12-13; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 82-83, 86-89; <http://www.rekishu-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/25847>）。それらも、この塔周辺の霊域性の維持確保にとって意味ある付加物であったといえる。そして、同窓会は、この地がますます観光地化していくこと、慰霊の気持ちをかかわらずしももたない訪問者が増加することに、痛惜の念や忸怩たる思いを抱いていた。柵の設置や土地購入は、この地のさらなる俗化・観光地化を押しとどめようとする意図のあらわれにほかならなかった。しかし、当時の同窓会のそうした態度や認識は、1980年代に資料館の設立に邁進した時点のそれとは、およそ対照的である。後者の時点では、遺族ではない人々の来訪をむしろ積極的に受け入れようとしたのだからである。では、次節で、こうした転換の経緯をみていくことにしよう。

第3節 資料館建設に向けた跳躍

同窓会館という拠点を得たひめゆり同窓会では、母校の再建を期待する声が高まり、その検討もはじめられた。とくに東京支部ではこれに積極的な声上がり、1971年5月の東京支部総会では、仮称ひめゆり学園の建設が満場一致で可決された。これを受けて、同窓会本部でも慎重な検討が進

められた（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 16, 2004: 119）。

しかし、同窓会が母体となって学校を新たに経営するには種々の困難があった。問題のひとつは場所である。周辺地域の開発が進む中、同窓会館のある元校地周辺に学校を再建することは、もはや不可能であった。財源の問題もあった。同窓会館の貸店舗からの収入と新たに募る寄付によって、学校の建設と運営を安定的に行いうる保証はなかった。さらに、コンセプトの実現という点があった。同窓会が目指したのは、単に学校をつくるということではなく、インタビューした資料館関係者の言葉を借りれば、「自分たちの後輩にあたる若い世代を育てる」「かつてあった誇るべき女師・一高女の伝統を引き継ぐ学校を再建する」ということであった。また、それは、戦後の学制に即せば、高校から短大または大学に相当するものをつくることを含意した。既設の公立・私立の女子短大に女師・一高女の伝統を引き継いでもらうという案も検討された。だが、これも含め、結果的に、同窓会による高等教育機関運営というプロジェクトは断念せざるをえないという結論に達した。1977年9月の同窓会理事会でこれは正式決定され、今後は同窓生名簿と沿革誌（1987年に出版される）の作成に力を注ぐこととなった。ただし、その後、ひめゆりの意思を継ぐ人を養成したいという同窓会の思いは、女子教育のための奨学金制度の創設という方向で検討されることになった。各種の奨学金がある中で同窓会がまたひとつ奨学金を立てることに、東京支部からの異論などもあったが、1983年に沖縄県人材育成財団に基金を委託し「ひめゆり同窓会奨学基金」を設立することになった。この奨学基金は、2011年には総額1億円に達し、今日までつづいている（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 25, 31, 2010: 119; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2011; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 119-125）。

さて、このころ2つの転機となる出来事があった。ひとつは、1977年に戦死者の33年忌がめぐってきたことである。沖縄地域では、33年忌は「終わり焼香」（ウワイスコー）とも呼ばれ、これをもって通常の死者は祀り上げとなる。この年の6月23日（慰霊の日）には、糸満市摩文仁の平和祈念公園で戦後最大規模の戦没者追悼式が開催され、各市町村の慰霊碑の前でも例年より盛大な慰霊祭が催行された。もっとも、それは戦死者の供養にひと区切りがついたということにすぎず、それ以降も諸団体・自治体による慰霊祭は継続された。ひめゆりの塔の前でも、6月19日に33年忌の慰霊祭が行われた。このウワイスコーで終わりとせず、みなさんと戦争を忘れず、戦争体験を伝えることが残されたわれわれの使命と考え、恒久平和の新たな出発点と位置づけたい、という追悼の言葉が同窓会長から述べられた。学徒隊生存者たちは、この33年忌慰霊祭において、戦死した学友たちを今後も忘れることはないという思いをあらためて強くし、それを死者の御霊に誓った。そして、遺影を集めて彼女たちが生きた証として残そうというアイデアも生まれた。1979年3月4日には、戦死したひめゆり学徒隊員の卒業式も開催された。遺族にも生存者が卒業証書を手渡しに行ったが、なお娘の帰りを待っていると述べる母や、卒業証書を受け取ってもどうすればよいかわからないと述べる母もおり、生存者は、生存者として、あらためて遺族の複雑な思いに接することとなった。同様のことは、1995年の戦後50年を機に行った仏前供養の際にもあった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 23-25, 2010: 152-157, 225, 228; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 149; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2012: 302; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 299; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 86, 115-118）。

いまひとつの転機は、1980年7月から、朝日新聞社が沖縄タイムス社と共催で「あれから35年ひめゆりの乙女たち展」を東京と那覇を含む全国9か所で開催し、これが社会におおきな反響を呼

んだことである（那覇での展覧会名称は「あれから35年 鉄の暴風・沖縄戦の全容」であった）。ひめゆり学徒隊関係者は、おおくの学徒隊がいた中で、ひめゆり学徒隊だけが強調されて前面に出ることには否定的な考えをもっており、「鉄の暴風展」といった名称にすることを提案したが、朝日新聞社側が「ひめゆり」を付すことで集客力を高められるということ強く主張し、上記の名称に落ち着いたのである。展示内容は、仲宗根の手記をベースにしたものであった。ひめゆり学徒隊生存者は、監修という立場で各地の展覧会の現場に向かった。そのおおくは教員であったの



写真3-10 「ひめゆりの乙女たち展」（東京）
（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 9; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 149)

で、各自が有給休暇を数日取得して対応した。彼女たちは、このときは証言者として語りを行うことはなかったが、あふれるほどの人々で埋め尽くされた会場で、涙を流しながら展示を見る人々の姿に直に対峙することになった。監修として展覧会の現場に行ったメンバーの中には、「おおくの人々がひめゆりのことを知らない、ぜひ知ってほしい」という強い思いを抱く者もいた。東京支部では、この展覧会を見たメンバーから、その展示内容をもとに恒常的な資料館を建ててはどうかという話が持ち上がった。上に触れた奨学金制度の創出という案よりも、資料館の建設こそが同窓会にとってふさわしい活動ではないか、というのである。展覧会の終了後、主催者側から展示資料をひめゆり同窓会に寄贈したいという申し入れがあったにもかかわらず、収納場所がないという理由でこれを辞退することとなった、という経緯もあった⁸。東京支部の代表10名余は、1982年2月に那覇を訪れ、展示資料受け入れのための資料館建設を希望する旨、同窓会本部に伝えた。およそそれまで、同窓会において資料館建設というアイデアは出ていなかった。つまり、この展覧会の成功と残された資料の取り扱い問題が直接の契機となって、母校再建の夢が潰えた同窓会は、資料館建設というオルタナティブに向かい合うことになったのである。高等教育機関の設立もそうであるが、この同窓会による平和資料館の建設も、前代未聞であり、おそらく全国で唯一の取り組みであった（朝日新聞東京本社企画部（編）1980; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 25-26, 31, 2010: 9, 119-121, 132; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2012: 302-303; 櫻澤 2015: 225; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 683; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 16）。

東京支部からの資料館建設という提案にたいして、沖縄の同窓会本部はかならずしも賛成ではなく、むしろ資金面の負担と中長期的な運営についての懸念から、反対の意見をもつ者がおおかった。沖縄県立平和祈念資料館（2000年閉館、同年開館の沖縄県平和祈念資料館の前身）がひめゆりの塔から数キロ東にある摩文仁にすでにあり、また奨学金の創設に向けて準備が進んでいるということもあった。さらに、同窓会のメンバーの大半は60代以上、相思樹会のメンバーも50代であるという点もあった。しかし、一方で、後者のメンバーつまり学徒隊生存者の中には、先の展覧会の資料を生かす資料館を建設し、生きたくても生きることができずに戦場で死んでいった学友たちのことを後世に残したい、経験した戦争の悲惨さをおおくの人々に知ってもらいたい、そして戦争

⁸ この展示資料の一部は、2011年に東京大空襲・戦災資料センターやひめゆり同窓生の遺族からひめゆり平和祈念資料館に寄贈された（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2011: 1-2）。

の記憶を風化させてはいけない、という意見をもつ者がおおかった⁹。仲宗根もまた同意見であった。同窓会幹部と相思樹会のメンバーとが集まって話し合い、後者の複数名から建設を是とする意見が表明されたことを受けて、同窓会長が建設を提案し、反対意見はなく了承された。当時を知るある学徒隊生存者は、仮に採決であったなら反対されていたであろう、同窓会長が採決に付き「みなさん、つくりましょう」といったことがおおきかった、と述べる。これを受けて、1982年——この年は、歴史教科書の検定で沖縄戦での住民虐殺の記述が問題となった年でもあった——の6月6日の同窓会総会において、「ひめゆり平和祈念資料館」の建設が、500余名の同窓会員の満場一致で承認された。1983年1月からは建設業務を遂行する資料館建設期成会——同窓会の中に置かれ、会長は同窓会本部会長が務めた——が正式に動き出し、3月には資料館建設時の総合プロデューサーとなるX氏との折衝もはじまった。X氏は、1975年の海洋博の沖縄館の展示や、軍事博物館の様相を色濃くもつかたちで開館した沖縄県立平和祈念資料館のリニューアルなどを手掛けていた。そして、建設予定地、募金の方針、資料館の規模などに関する議論が具体化していった。X氏は、5月に上京し東京支部への説明も行った。7月に、期成会は、募金規模を1億2千万円とすることを決め、東京支部との密接な連携の下に建設を進めていくことを確認した。中央の財界などとのパイプもある東京支部のメンバーは、大口の寄付を獲得するべく努力し、企業回りのようなことにも取り組んだと聞く。東京の虎の門ホールを皮切りに、大阪、福岡、沖縄で、資料館建設のための資金を募るチャリティーショーも開催した。国や県とは一線を画し、公的資金を入れないというのが方針であった。ひめゆり学徒の生存者の中には、教員を早期退職し、報酬なしの手弁当で、建設運動に奔走するようになる者もいた。1989年8月31日までに、建設資金として2億円強が集まった（ひめゆり同窓会東京支部（編）1995；ひめゆり平和祈念資料館（編）2010：9-10, 31, 119-122, 225；公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014：41；本村 2016：88-90；櫻澤 2015：211, 223-225, 229；財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987：684；財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002：16-17, 24-25, 206-210, 2004：125, 132）。



写真3-11, 3-12 荒崎海岸とひめゆり学徒散華の跡

左写真の前方突端部が荒崎海岸であり、後方突端部が平和祈念公園のある摩文仁である。荒崎海岸では、教員・生徒あわせ13名が死亡した。右写真は、終戦直後に遺族が同海岸に建立した碑の風化・倒壊を受け、1972年に再建されたものである（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004：84）。

⁹ あるひめゆり学徒隊生存者は、糸満市の荒崎海岸で、米兵の銃の乱射で亡くなった友人の下敷きになって助かった。気がつくと、周囲では教師や他の友人が自決していた。そして終戦から10カ月、取骨のためにその場を訪れると、その友人は、自分が岩にもたれかけさせた姿勢のまま、黒髪を残して白骨化していた。それ以来、彼女はこの海岸もひめゆりの塔も訪れることを避けつづけた。あらためて1972年にその海岸を訪れると、友人の遺体のあった場所にはごみが散乱していた。それを見て、大事なことから目を背けてきた自分を責め、マスコミの取材に応じ、資料館にも関わるようになったという（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010：212）。序章第5節で述べたように、戦後ある程度の時間がたったからこそ、資料館建設は実現したのではないだろうか。

期成会は、資料館の組織こそ要の問題と認識し、内部にいくつもの委員会を設置した。財務委員会、資料委員会、常任委員会などである。こうして、同窓会は、親睦組織としての一面を保持しつつも、資料館建設（のちには運営）の母体組織としての性格を強くもつようになった。また、県内の学識経験者や女師・一高女の旧職員を構成員とする顧問委員会も設置した。資料委員会はX氏の発案であった。学徒隊生存者28名から構成された資料委員会は、資料館展示資料の収集・整理そして証言の採録等を担当し、開館までの約7年間、精力的に作業を行った。資料委員会は、1985年3月にはひめゆりの塔の立つ伊原第三外科壕に、同年4月には伊原第一外科壕と南風原の沖縄陸軍病院壕に入り、遺骨・遺品の収集調査も行った¹⁰。その背景には、資料館の展示資料の候補が存外すくなかったという事情があった。戦後40年を経て再度入ったこれらの gama では、遺骨とともに学友の名前の入った筆箱などもみつかった。学徒隊生存者にとって、gama に入ってから資料収集は、死んだ学友を思い出させる、耐えがたい心痛を伴うものであった。また、証言者に忘れたと思っている記憶を思い起こしてもらいこれを記録する作業にも、たがいにおおきな苦しみを感じるようになった。しかし、X氏は、生存者が生の声で訴えることの重要性を説いた。戦死したかつての恩師や学友たちの無念を慮ることで、資料委員会のメンバーはこうした精神的負荷に耐えた。「私だけ生き残ってごめんなさい」という親友にたいする気持ちから、館の準備運営に関わる決意をした者もいる。資料委員会は、同年6月に「写真・図表資料班」「証言資料班」「現物資料班」にそれぞれ分かれ、証言テープ起こしや諸資料の整理作業を進めた。家族との時間を削って夜まで作業をする日々がつづいた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 31, 105, 122-127, 212, 225-226; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 212-214, 238, 256, 2004: 134）。

総合プロデューサーのX氏は、経営的発想にもすぐれた人であり、資料館そのもののあり方を方向づけた。ひめゆり関係者は、資金面からも、遺品の展示を中心とした比較的ちいさな資料館を考えていたが、X氏は来館者が大型バスで訪れることを想定し、広い敷地を確保すべきであると考えた。館が小規模なものであれば人は来ない、ある程度のおおきさが必要である、という見解であった。そして、1日1200人、1年で45万人の入館者があれば資料館は維持できる、といった具体的な数字を挙げて、設定した入館料（個人の大人300円、高校生200円、中学・小学生100円）¹¹だけで資料館を維持していくプランを立てた。こうした財政の観点から、当初の資料館職員は2名だけであり、ひめゆり学徒隊の生存者も当然のように無報酬で働いた。教員がおおかった同窓会・期成会のメンバーは、人々に広く戦争の悲劇を伝えたいという思いをもっていたが、事業運営の経験には乏しかった。X氏は、そうした彼女たちの思いの実現に、長期的な経営戦略をもって応えたのであった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 33-34, 2010: 133; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2020; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 172-181）。

こうした資料館の準備作業に並行して、建設に向けての行政との折衝も本格化した。ひめゆりの塔のある一帯は、沖縄戦跡国定公園の第二種特別地域となっており、県の許可を得なくては資料館建設に踏み出すことができなかった。期成会は、1985年9月に糸満市を介して県に建設許可申請

¹⁰ 伊原第三外科壕では、1993年に2週間の地質学調査も行われた。長期にわたる保存が可能かどうかの確認のためである。gama は、おおきな問題はなく、緊急の対策なしに保存が可能と診断された（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 35; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 87）。

¹¹ 個人入館料は、2014年から消費税増税に伴い、大人310円、高校生210円、中学・小学生110円となり、2021年4月12日からはリニューアル（および2019年10月の消費税増税）を受けて、大人450円、高校生250円、中学・小学生150円となった。団体入館料も同時に改定された。

書を提出した。県の担当部署は自然保全課であり、その申請の審議に当たったのは沖縄県環境保全審議会であった。県と審議会は、ひめゆりの塔の後方に資料館を建設する計画となっているが、それではひめゆりの塔の参詣者が資料館入館者を拝むかたちとなり、ひめゆりの塔の尊厳性が損なわれる、そもそも戦後40年「霊域」としてイメージを定着させてきたひめゆりの塔に変更を加えることに問題がある、また、ガマに近接した地下に建造物を建てることには安全上の問題がある、といった点を指摘し、資料館建設に難色を示した。期成会側は、こうした県側の見解にたいして、霊域とはいったい何であるのかについての対抗理論をもち、説得しようとした。そこで、県外にある霊域めぐりを実施した。室生寺、伊勢神宮、那智権宮、高野山などを11月に6日間で訪れたのである。この霊域めぐりによって、霊域とは何かに関する発見・知見はとくに得られなかったが、資料館の建設場所を当初の予定よりも後方にすることによって神聖性を確保する方がよい、という認識は得られた。期成会側は、12月に、ひめゆりの塔の場所にある建設予定地において県の環境保全審議委員に建設計画を説明したり、建設が自然の破壊につながるという懸念にたいして資料委員会が敷地内の樹木植生分布調査を実施したりし、対応した。そして、1986年3月に、県の要望にしたがって建設予定地を当初の計画からずらす決定をし、これを沖縄県環境保全審議会に申し出た。ひめゆりの塔の霊域としてのイメージを壊そうとするのではない、すでにひめゆりの塔が観光地化している現状を踏まえ、ここをより敬虔な場所にしたいのである、その場合、霊域としての神聖性は保ちたいが、ここは神のいる場所ではない、死者は無念であったろうし、平和を伝えることこそ大切である、というのが同窓会側の認識・主張であった。いかなる戦争もあってはならない、戦争の悲惨さと平和の尊さを訴えるのがこの資料館建設の趣旨である、というコンセンサスも固まった。こうしたさまざまなやり取りを経て、1987年3月に資料館建設地となる県有地5278㎡を購入し、同年10月にあらためて糸満市を介して県に資料館建設許可申請書を提出する運びとなった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 31, 128-129, 226; 本村 2016: 97-100; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 144-146, 153, 211, 221-226, 239-244, 2004: 135）。

しかし、ここでひとつの問題が発生した。いわゆるガマ展示問題である。土地の購入後、資料委員会は、ひめゆりの塔の下にあっておおくの学徒が死亡したガマそのものを来館者に見せたいということ、強い要望として提案した。展示資料があまりない中で、ガマこそ戦争の悲惨さを見る者に追体験させる力をもった第一級の資料であり、ガマ展示の成否が資料館開館後の運営を左右する、というのである。1980年代の沖縄では、戦跡であるガマに入ることが平和学習において効果的であるという考え方やその実践も一部にはあったが、一般の世論においてガマは神聖視されており、そこに足を踏み入れ見せるということに否定的な考え方は強かった。とくに行政はガマ展示に否定的であった。同窓会幹部の中にも、ひめゆりのガマに一般の来館者が足を踏み入れることに反対する意見はあった。安全面の配慮に加え、ガマは墓場に相当すると捉えられたからである。しかし、ものそれ自体に語らせることの重要性を説くX氏の説明もあり、同窓会でもガマ展示を是とする意見が多数派となり、県知事にたいしてガマの展示を許可するよう陳情書を提出するとともに、ひめゆりの塔の前や那覇の街頭で署名活動を行うなどした。新聞の投稿欄にも、ガマ展示に反対する意見と賛成する意見の双方がそれぞれ多数寄せられた。同窓会は、ガマの実物展示の是非を主題としたシンポジウムも催行した。このシンポジウムでは、ガマは第一級の資料であって、これを見せることに賛成するという意見と、ガマはおおくの人々が亡くなった霊域であり墓に相当するものである、それを一般に公開し来館者がいわば土足で踏み込むようにすべきではない、という反対の意見とが交わされた。ガマ展示案は、最終的に展示室を地下に配して最後にガマをガラス越しに見るが、人は入らない、という方向に向かった。だが、県知事が資料館の建設は許可するがガマの実

物展示は認めない、というコメントを出したことを受け、期成会側はこれを決着の機と捉えて、実物のGammaの展示を断念し、代わりに実物大模型のGammaを館内に設けることを決めた。こうして、いよいよ資料館建設は実現に向かったのであった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 38-43, 2010: 31-32, 129-132, 226; 小林 2002: 285-288; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 148-153, 155-205, 272-298, 2004: 135）。このGammaのジオラマの作成も、X氏のアイディアによるものであった。また、同窓会関係者は意識していなかったであろうが、X氏はGamma問題が世論の注目を浴びたことの宣伝効果を十分意識していたとも聞く。

このように、Gamma展示を是とする同窓会側の認識は、Gammaを墓に準じる神聖な場所と捉え、遺族でない一般の人々のGamma立ち入りに否定的な見解をもつ行政側（そして世論の一定数）の認識から、すでに隔たったところにあったといえる。前者の霊域観は、前節の終わりに触れたその当時（1970年代まで）の霊域観——それはGamma展示問題に対処した行政側のそれとおなじであったと考えてよい——から変化したのである。彼女たちは、神聖な場所であるがゆえに、それを一般の人々にも開放し、戦争の悲劇を現場での体験から知ってほしい、と願うようになったのである。もっとも、現在から振り返れば、資料や遺品の収集のためにGammaに入ることに躊躇を覚えた学徒隊生存者たちが、そのGammaの前で、開館後に行ったような証言を語りえたであろうか、という疑問はある。関係者からもそうした声を聞くことができる。ともあれ、こうした紆余曲折や認識の変化を経て、着工から7カ月、総工費3億3千万円強（寄付金2億2千万円、銀行借入金1億1千万円）のひめゆり平和祈念資料館は、時代が平成となった1989年の6月23日の慰霊の日に開館した。彼女たちは、さまざまな苦労を経験しながら、資料館づくりを、「私たち生き残った者の使命」と認識し、これを原動力として、また死んでいった学友たちにたいする「ごめんなさい」という思いにも駆られながら、「心をひとつにして」、7年におよぶ無報酬の仕事に打ち込んできたのであった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 103-104, 131-132, 190; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 135-136）。

同窓会や資料館の関係者は、この開館の日に朝からかなりの雨が降ったことをよく記憶している。生存者たちは、これを沖縄戦に殉じた学友たちの涙——うれし涙か、悲しみの涙かはともかく——と受け取った。午前10時から開館式があり、車椅子の仲宗根や、ひめゆり学徒隊長の遺児らが招かれ、傘をさしてのテープカットがあった。同窓生、戦死したひめゆり学徒の父母ら遺族、学校関係者を含む、おおくの人々が資料館を訪れ、館内は終日人でごった返しであったという。中には、証言文を読んで涙を流す人、学徒の遺影に向かって語りかける人もいた。慰霊の日であるた



写真3-13 女師・一高女の校門（1943年）



写真3-14 ひめゆり平和祈念資料館（1989年）

（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 90, 97）

ひめゆり平和祈念資料館が、女師・一高女を模したものであることがわかる。

め、午後2時からひめゆりの塔の前で慰霊祭も行われた。そして、午後7時から、ホテルで盛大な開館祝賀パーティーが開催された。このパーティーの余興のために、同窓生は多忙な中でもしっかりと練習していたという（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 16, 36, 109-110, 240-241; 西平2015(1995/1972): 192; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 21, 300-301）。

第4節 開館とリニューアルそして現在

さて、どれくらい人が来るだろうかという関係者の懸念に反し、資料館には多数の人々が訪れるようになった。初年度は、6月の開館から年度末の3月までの半年で47万人をこえ、その後も年を追うごとに入館者は増加していった。ひめゆり平和祈念資料館の開館時期は、沖縄を修学旅行先とする学校が増加する時期に重なる。沖縄県の再三の文部省（当時）への要請もあって、1987年以降に修学旅行の飛行機利用制約が緩和され、平和学習をひとつの柱とした修学旅行先に沖縄を選ぶ学校が飛躍的に増加した。その学校数は1990年には500校、2000年には1600校、2001年のアメリカ同時多発テロによる落ち込みから回復した2005年には2500校になった。これが順調な入館者増のひとつの背景である。開館当初の数年間個人が7割以上、団体が2～3割であったが、その後団体の割合が増えていった。コロナ禍前の2010年代では半数以上が団体客であり、その6割強が高校生であった。入館者がもっともおおかった年は開館10年後の1999年であり、100万人を記録した（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 47-49; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 6, 2021: 6; 櫻澤2015: 262-263）。

入館者の増加は、毎日3～4名、学徒隊生存者が「証言員」として展示室で説明に当たる、つまり生き残ったひめゆり学徒の語りを直接聞くことができるという点が、資料館の特色として認知されていったことにもよる。実は、開館の当初から、学徒隊生存者が毎日展示室で説明に当たるというスタイルが確立されていたわけではなかった。むしろ、彼女たちは、開館前の超多忙な日々代わって、開館後やるべき仕事はかなり減るであろう、学徒隊の死者の遺品や生存者の重い証言と向かい合う苦しみから解放されるであろう、と思っていた。しかし、プロデューサーのX氏は、1年間は学徒隊生存者から説明をしてほしい、と頼んだ。この資料館はものに語らせようとしており、展示にあまり説明をつけていないから、というのがその理由であった。生存者たちは、窓口でのチケット販売を含む館の運営業務をこなすとともに、入館者にたいして自らの体験を含む戦争の悲惨さを語るようになった。そして、この生きた語りこそ、入館者に資料館の理念や目的を伝えるきわめて有力な方法であり、その語りの需要もおおきいということが理解されていった。1992年には、予約制で、修学旅行生などの団体に30分ほどの講話を行い、平和学習に役立ててもらおうというスタイルが確立された。ただ、この予約申し込みがおおくなり、運営に支障が生じたため、1995年からは1日の回数を制限するようになった。生存者たちは交替で適宜館内に立ち、質問を受けたり証言をしたりした。ほかに、修学旅行生などの団体が泊まるホテルなどに出向き、館外で語りを行う「外部講話」や、バスをチャーターして学徒隊生存者が戦跡を案内する「戦跡めぐり」も、要望に応じて行った。証言員として人前で話すに際しては、躊躇を覚えるとともに、ある種の勇気も必要となる。死んだ学友の姿が脳裏に浮かぶこともある。ある学徒隊生存者は、自分が重症の学友を置き去りにして撤退したこと、それによって彼女が死んだことへの思いを、当初は語りえなかったが、のちにそれを声にすることができるようになった。証言員をつとめる生存者たちは、館の運営の中心メンバーとなり、学芸員とともに資料の収集と整理そして展示の企画に関わりつづけた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 50-52, 67, 102, 105, 108, 131, 140-141, 190; 財団法人沖縄県女

師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002:370)。

館内展示は、「沖縄戦前夜」「南風原陸軍病院」「南部撤退と喜屋武半島」「鎮魂」「回想」の5つの展示室からなり、第4展示室「鎮魂」には死者の遺影が並んだ。この遺影は、33年忌の際に集めたものを使用した。当初、ひめゆり学徒隊の遺族の中には、死者を見世物にしているという嫌悪感に近い感情をもつ者もいた。新聞にも、死者を見世物にして金をとっているという批判的な投稿が寄せられることもあった。しかし、開館して数年がたつと、遺族の中からも、学友たちといつも一緒にいられてよかったとする肯定的な意見が聞かれるようになった。資料館側は、この第4展示室を遺影の展示室というよりも、遺影を通して死者と向かい合う、まさにレクイエムの空間であると位置づけている。死者の遺影に向かい合う際、学徒隊生存者は、自然とこうべを垂れたり、心の中であるいは声に出して死者たちに語りかけたりする(ひめゆり平和祈念資料館(編)1989,2010:135-136;財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2022:304-306)。この第4展示室に集約されるように、ひめゆり平和祈念資料館は、まさに平和を祈念する——とともに戦争の悲劇の記憶を再喚起する——空間なのであって、そこに資料館という体裁が付与されているのだと理解される。

1990年には、1周年記念特別展として、「ひめゆりの青春」と題し、ひめゆり学徒隊が軍国少女として教育された状況を描く展示を行った。その内容は、のちの展示リニューアルへと引き継がれた。5年目の1994年には、学徒隊生存者の証言映像を制作し、上映会を行った。また、5周年記念座談会として、有識者7名を招き、次世代に平和をいかに継承するかを主題とした意見交換も行った(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010:32,41,43-44,53,158-160;財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002:337-340)。

初代の館長は仲宗根政善であった。プロデューサーのX氏との契約は数年におよぶものであったが、その間X氏と同窓会関係者との間には見解の相違が明確になることもあった。仲宗根は、X氏の見解を尊重するよう、教え子たちに語っていたという。その仲宗根は、資料館の順調な運営を見届けるかのように、1995年2月に死去した。ひめゆりだけではなく全学徒について伝えるべきだ、という仲宗根の意向を受け継いで、1999年には10周年記念特別展として「沖縄戦の全学徒たち」を開催した。仲宗根の7年忌に当たる2001年には、仲宗根を主題とした企画展も開催した(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010:36,42,143-144,160-164;森2016:148,185-188;財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002:343-346)。

2002年7月には、女師の付属小学校を前身とする大道小学校の敷地内に学校跡地の碑を建立した。大道小学校は、1946年に豊見城村(現豊見城市)で戦後開校し、1947年にふたたび元校地の安里に移転していた。母校再建の夢が実現しない中、学徒隊生存者にとって、この元付属校の安里での再開と存続は、ひとつの代替的な希望となった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010:38)。

開館10年の1999年から、大半が70歳代となった学徒隊生存者たちは、自分たちがやがて証言員として立つことができなくなるという、近い将来にかならず訪れる課題に向かい合う議論をはじめた。これは「次世代プロジェクト」と名づけられた。開館当初は、資料館をいつまでつづけられるものだろうかという思いであったが、すでに資料館は確固たる存在感を示すようになっていた。関係者もそれを自覚し、いかに存続させるかが次の課題であるという認識が共有されたのである。可能性としては、将来的に行政に資料館の管理を委ねるという選



写真3-15 学校跡地の碑(大道小学校)

択もありえたが、公立になれば大切にしてきた資料館の理念が伝わらなくなるおそれがある、という認識が大勢を占めた。また、そもそも戦争責任の観点からも、また建設時のやりとりの経緯からも、国や県に委ねることには相当な違和感があった。学徒隊生存者たちは、資料館を「後世にずっと継承することが私たち生き残った者の使命」と明確に決意し、自ら後継問題に取り組もうとしたのである。そして、語り継ぐ後継者の育成、生存者の証言映像の恒常的な上映、そのための展示のリニューアルの3つが、具体的に取り組むべき課題と位置づけられた。2003年9月には、その一環として、生存者6名とサポートスタッフがヨーロッパ各地の平和施設を訪れ、今後あるべき展示や企画のあり方を学んだ。館内に証言映像を映すデッキを設置し、証言員の説明がなくても理解できる展示へと切り替えをはかるという案は、この研修旅行から得られたものである（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 44-45, 167-171, 183-185）。

こうした準備を経て、15周年に当たる2004年に展示の大幅なリニューアルを行った。戦争を知らない若い世代にわかりやすく語りかける解説、視覚に訴える映像、そして生存者の体験と証言を通して、ひめゆり学徒隊を襲った戦争の悲惨さを伝えることを重視した。新たな第1展示室「ひめゆりの青春」では、戦場に向かう前の学徒の生き生きした姿を強調し、ここから、写真・図表・遺品といった視覚的資料を中心に戦争の実態を示す第2展示室「ひめゆりの戦場」、米軍の映像とひめゆり学徒隊の証言を大画面で映す第3展示室「解散命令と死の彷徨」へと導くことで、学徒隊が直面した光と影のコントラストを演出した。第4展示室「鎮魂」と第5展示室の「回想」は、そのまま継承した。来館者は、終戦と資料館建設にいたる思いが記された第5展示室で、明るい外の花々を見ながら感想文を書く。そして、新たに多目的ホールとして第6展示室「平和への広場」を設けた。また、後継者育成の観点から、2005年に証言員の仕事を引き継ぐ「説明員」1名を採用した。2006年には、学芸課と総務課の2課体制への組織改編も行い、2009年には学芸員を2名から3名に増員した。2022年現在、学芸課は学芸員・説明員合わせて5名の体制である（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 13-14, 261; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2022: 27; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 184-193, 213-217）。

開館20周年にあたる2009年には、老朽化した白い「ひめゆりの塔」を全面的に改装した。新たに学徒隊の死者18名の名前を追記し、227名がこの白いひめゆりの塔に刻印されることとなった。20周年記念誌も作成され、資料館の設立から2009年当時までの歩みや秘話が綴られた。20周年記念特別企画展として「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」を開催し、未公開資料も展示した。開館後20年を迎え、なぜ自分が生き残ったのかと自問していた学徒隊生存者が「生かされている」と感じられるようになった。ただ、その一方で、彼女たちの高齢化と体力の衰えも顕著になってきた。当初28名いた証言員はこの20年で17名へと減少し、その日の体調により資料館での証言員の仕事を休むという場合も出てきた。説明員・学芸員の増員は、これを受けてのことであった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 174, 197-199, 209-210, 214, 230）。

来館者が書き記した感想文は、開館からしばらくまでは毎年2万件ほどあり、来館者を年平均80万人とすれば、40人に1人の割合で感想文が綴られたことになる。中には批判的なものもある。資料館は、これを文集として刊行してきた。これも、学徒隊生存者の作業であった。資料委員会メンバーを主軸として開館後に組織された運営委員会は、「感想文集部会」「写真資料部会」「実物資料部会」の3作業部会に分かれ、学芸員とともに業務に携わった。この作業部会と運営委員会／資料委員会は、何度も組織体制を再編した（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 52, 64, 231-237, 268-271）。

開館以来、資料館は財団法人ひめゆり同窓会の下におかれてきた。2001年までは同窓会長が財団法人の理事長であった。財団法人ひめゆり同窓会理事会における資料館や館長の位置づけはたびたび改編された（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 231, 234; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 310-313, 2004: 158-173）。組織としておおきな改編となったのは、2011年6月の公益財団法人化であった。「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」は、公益法人制度改革に伴って認可を受け、「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団」（略称はひめゆり平和祈念財団）に移行した。安里の土地や建物なども、財団の所有である（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 10, 40）。

2013年4月の時点で学徒隊生存者が務める証言員は10名いたが、夜にホテルなどで行われることがおおい、修学旅行生などに対応する証言員の館外派遣（外部講話）は、体面を考慮してこの年の9月末で終了とした。さらに証言員が減少する中、2015年3月をもって館内の「元ひめゆり学徒による講話」を終了し、説明員や学芸員による「次世代による平和講話」へと引き継いだ。ただし、その後も、数名の学徒隊生存者が可能な範囲で資料館での語りを継続した。同窓会の本部は、長らく安里の同窓会館にあったが、2015年に資料館の建物に移転し、安里の建物は賃貸物件となった。2015年5月に開かれた財団の定時評議員会では、理事と評議員が改選され、代表理事にはじめて同窓会メンバーでない、元琉球大学教授の有識者が就任した。博物館の企画や運営は、学徒隊生存者のイニシアティブと作業を中心とする体制から、学芸課の若い世代の職員のアイデアと作業をより生かす方向へと徐々に変わり、財団の世代交代・脱同窓会化も進んだ。こうした中で、公益財団法人への移行を機に新規事業として取り込まれたのが、平和研究所の設立準備であった。ひめゆり平和祈念財団は、資料館を未来永劫存続させたいと願っていた。その一環として、資料館の中に平和研究所を設立するという事業が位置づけられた（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 45-47; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2015: 1-3）。

2015年に私がインタビューしたある学徒隊生存者は、これまでを振り返りながら、「遺族の方がこの資料館に来て、遺影に話しかけたりしているのを見て、資料館をつくってほんとうによかった、と思う。もし学校を再建していたら、資料館のようなものもできたのかもしれないが、こういうたくさんの方が来るものではなかっただろう。生き延びた人として、資料館でよかったと、いまは思う」と述べていた。

ひめゆりとおなじく戦後に廃校となった学徒隊生存者が再結成した他の同窓会は、いずれも衰退や消滅の段階を迎えつつある。積徳学徒隊（ふじ学徒隊）を結成した積徳高等女学校の「ふじ同窓会」は、2015年の慰霊の日の戦没者追悼法要において同窓会の解散を表明するにいたった。戦没者を思えば断腸の思いであったが、高齢化による活動継続の困難さに直面する中での苦渋の決断であった。戦没者追悼法要も、2016年度からは自由参拝となった。白梅学徒隊を結成した県立第二高等女学校の白梅同窓会も、慰霊祭は自由参加に切り替え、2019年からは、白梅同窓会、遺族らからなる白梅協力会、共催組織の若梅会の3組織からなる「白梅継承の会」が慰霊祭を主催するようになった¹²。ひめゆりの場合、コロナ禍の2020年以降は同窓会総会を開催できず、同窓会活動は

12 沖縄戦の女子学徒隊の有志が結成した「青春を語る会」も、会員の高齢化から、2016年3月26日の月例会で解散を決定した。青春を語る会は、1999年のひめゆり平和祈念資料館での「沖縄戦の全学徒たち」展をきっかけに、ひめゆり以外の学徒隊の生存者がたがいの体験を語り合い連携をはかるため、この年に発足した組織である。当初は、瑞泉・白梅・積徳の学徒隊生存者7名から出発し、一時期最大で28名の会員がいたが、解散直前は9名となっていた（新崎 2016: 133-134; 中山・平野 2014; cf. 青春を語る会（編）2006; 白梅同窓会（編）2006）。



写真3-16 積徳高等女学校慰霊之碑



写真3-17 白梅之塔

1943年に開学した積徳高等女学校は、1918年に那覇の松山にある大典寺内に開設された私塾を前身とする。この積徳学徒隊の慰霊碑も、大典寺内にある。

白梅学徒隊を構成した沖縄県立第二高等女学校の出発点は、1905年創立の私立那覇女子技芸学校であった。1921年に那覇市立実科高等女学校、1924年に那覇市立高等女学校となり、1928年に沖縄県立第二高等女学校となった。校舎は1944年の十・十空襲で焼失し、民家等で分散授業が行われたが、戦争の激化で学校機能は消滅し、戦後自然廃校となった。白梅之塔は糸満の国吉に1947年に建立され、2度建て直された。なお、現在の松山公園の校地跡には、「白梅の乙女たち」像がある。

事実上収束のときを迎えつつあるが、資料館を建て公益財団法人化を進めたため、慰霊祭の継続に関する懸念はないといってよい（普天間 2016: 10; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 212; <https://ryukyushimpo.jp/news/preentry-244713.html>; <https://mainichi.jp/articles/20220423/ddm/041/040/071000c>; cf. 共同通信「戦争証言」取材班（編）2016）。

付言すると、ひめゆり同窓会とくに学徒隊生存者は、資料館が金儲けをしていると思われたくない、という強い思いを抱いてきた。沖縄では「もうきじく」という言葉がある。儲けのためではなく社会のためだとしながら、実はしっかり儲けている、というあり方を揶揄する表現である。沖縄社会では、ひめゆりにたいして好意的な見方だけがあるのではない。ひめゆりが突出して知名度が高く、だから戦争体験や悲劇を話し結果的にビジネスをしている、そもそも名もなき人々はただ死んでいったのであって、ある種のエリートであるからこそ悲劇を語るができる、といった意見を、私は沖縄島南部で聞いたことがある。また、ひめゆり平和祈念資料館だけではなく、沖縄の博物館やメディアが一般に沖縄戦がいかにひどいものであったかを繰り返し語るが、庶民が戦争や紛争に巻き込まれ犠牲となるのは世界各地の各時代で起こっているのであって、沖縄戦の悲劇はかならずしも特殊なものではない、むしろ民間人の犠牲という観点から世界各地とリンクすることが重要なのではないかと、しかし、ひめゆりや県の平和祈念資料館はそうした方向に進んでいない、という意見を聞いたこともある。平和研究所は、まさにこうした見解への回答となるべく準備されたものと考えられる。

構想から6年を経た2017年10月16日、財団理事長・資料館館長・学徒隊生存者らが参加し、「ひめゆり平和研究所」の開所式が行われた。資料館内に設けられたこの研究所は、資料館資料の整理、戦争体験の継承や展示手法の研究、国内外の団体や研究者との共同事業の実施などにより、ひめゆり平和祈念財団の理念を広く世界に発信することを目指している。平和研究所は、資料館と一体となって財団の理念の実現と情報発信を担うべく、活動を進めており、1名の研究所員が配置されている（ひめゆり平和研究所（編）2020）。

戦後75年の節目となった2020年には、開館30周年記念事業の一環として、2度目の展示リニューアルを行った。当初は2020年7月にリニューアルオープンの予定であったが、新型コロナウイルス

ス感染症拡大の影響を受け、2021年4月12日に開館を延期した。本章脚注11で触れたように、このとき入館料も改訂した。このリニューアルは、戦後生まれの学芸員が中心となって、元生徒らと意見交換しつつ進められた。「戦争からさらに遠くなった世代へ」戦争の記憶を伝えていくため、傷病兵を看護したり遺体を埋葬したりする学徒隊の姿をイラストで表現しつつ文字情報を減らし、新たな展示品を加え、わかりやすい表現になるよう工夫した。まず、導入展示として、ひめゆり学徒となる前に撮られた在学生の笑顔の集合写真をロビーに掲げた。これまでの展示では硬い表情の写真をもちいていたが、笑顔の写真こそいまの若者たちに訴求力をもつと考えたのである。第1展示室は「ひめゆりの学校」となり、校舎正門へとつづく相思樹並木のイラストを導入部とし、戦前の生き生きとした学校生活や、それが戦争に伴って変化する状況を紹介する。第2展示室「ひめゆりの戦場」でも、新たなイラストを活用し、陸軍病院壕にいた学徒の仕事や臨戦状況下の様子を伝える。第3展示室「解散命令と死の彷徨」では、新たに英字幕をつけた証言映像や戦時の映像を大画面で上映する。当初は外国語の音声ガイドを導入する計画もあったが、コロナ禍で外国人観光者の入館が見込めないこともあり、これはいったん保留となった。第4展示室「鎮魂」では、学徒の遺影の脇にそれぞれの人柄を紹介する説明文を新たに添えた。今後、中国語・韓国語の証言本の増設を行う計画もある。第5展示室は新たに「ひめゆりの戦後」となり、学徒隊生存者の戦後や資料館設立までの道のりを説明する。学徒隊生存者が生き残ってしまった負い目を感じていたことや、戦後教師となった者たちが教え子に戦争体験を語れなかったことにも触れている。また、第5展示室と第6展示室の間には、資料館が作成した2本の映像を上映するスペースも設けた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2021；公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2020: 1, 2021: 1-4, 2022: 3-4）。2度目のリニューアルと1度目のそれとは基本コンセプトに変わりはないが、入館者の大半が戦争のリアリティをまったく知らない世代に移行したことを反映し、見る者を圧倒するような戦争・戦場の過酷さを示す写真・音響・色づかいを、マイルドでソフトな情報提供のあり方へと組み替えている。

このように、資料館は世代間継承を順調に進めている。ただし、懸念もある。入館者の減少傾向である。2009年度にはじめて年間入館者数は80万人台を割り、2019年度は年明け以降のコロナ禍の影響もあって491,345人となった。2020年度の入館者数は66,532人（前年度比86%減）、2021年度は93,936人となり、館の運営費の8割を入館料が占める資料館にとっては厳しい状況になった。修学旅行がキャンセルとなる中、小中学校・高校・大学からの依頼を受け、資料館はオンラインで平和講話を行うようになった。少子化もあって、修学旅行等学校団体入館数は2018年度から2000校を割った。コロナ禍以前からの入館者減少傾向は、沖縄の他の戦争関連博物館においても観察される。しかし、当時、沖縄の入域観光者数は右肩上がりが増加していた。やや古い資料ではあるが、2012年度「戦略的リピーター創造事業」報告書によれば、沖縄に来る観光者のリピート率は8割である。そして、ひめゆり平和祈念資料館の入館者の9割は県外観光者である（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2014: 5, 19, 2022: 6-8；公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2020: 7, 2021: 9；沖縄県文化観光スポーツ部（編）2013: 184；沖縄県平和祈念資料館（編）2015: 48, 2020: 49；<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/684681/>）。リピーター観光者が、資料館を訪問／再訪しなくなっている可能性がある。戦争の悲惨さを知り平和を念願するという資料館の設立趣旨に鑑みても、この入館者の減少傾向は気がかりである。

コロナ禍中の2020年2月から、学徒隊生存者2名が月2回ずつ行っていた証言活動は中止となった（<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/684681/>）。感染対策上の措置であったが、その後の緊急事態

宣言下における休館やリニューアルのための休館も挟み、資料館の再開後も、学徒隊生存者の館への来訪や証言機会はないままとなっている。資料館関係者も、語りの継続が次の語りの活力を生んできたといえるだけに、コロナ禍収束後の証言活動の復活は難しいと感じている。コロナ禍は、結果的に、学徒隊生存者から語りの機会を奪ったことになる。しかし、別の視点からいえば、それは、彼女たちが開館前にイメージしていた仕事からの解放の遅い訪れであるということもできよう。

2021年6月30日現在、ひめゆり平和祈念財団は、1名の代表理事、1名の執行理事兼資料館館長を含む、5名の理事からなる理事会と、同窓会関係者遺族や有識者からなる評議員会とにより、運営されている。前年度まで理事を務めていた3名の証言員（学徒隊生存者）はその任から退いた。財団と資料館の担い手は、ひめゆり後の世代へと受け継がれたのである（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和祈念資料館（編）2021: 25-27, 2022: 25-26）。

第5節 組織と霊域観の意図せぬ転換

本章のこれまでの記述のポイントを5つの点に整理するとともに、霊域の観光資源化を同窓会がいかにつえていたのかについて考察し、議論をまとめることにしたい。

ひめゆり同窓会は、沖縄地上戦においてひめゆり学徒隊を結成した女師・一高女の在学生そして卒業生が、戦後に邂逅を果たす中で立ち上げた組織である。「ひめゆり」というひらがな表記は、伊原第三外科壕と呼ばれるガマの上に建てられた「ひめゆりの塔」に由来する。おおくのひめゆり学徒隊メンバーが亡くなったこの場所で催行される慰霊の行事に集う、卒業生および卒業できずに廃校の憂き目をみた学徒隊生存者たちは、学友の死と母校消滅の現実と直面し、それゆえに母校再建という悲願を死者とも共有しつつ、1948年4月に新たに同窓会を結成した。序章第5節で触れたように、この同窓会は、やがてメンバーが減少し解散または消滅する運命を抱えながら誕生した時限結社であった。このように、この同窓会は、通常あるような同窓会とも、また戦前にあった女師・一高女それぞれの同窓会とも一線を画す、独特の組織であった。これが第1点である。

ひめゆり同窓会は、ひめゆり学徒の死を象徴するこの塔とガマのある場所が、慰霊の気持ちをもたない物見遊山的な訪問者によって荒らされることのないよう、篤志家や遺族らの協力も得て、塔とガマの周囲の土地を購入し、管理・整備した。そして、殉死した学友たちを慰め、彼女たちのことを忘れぬよう、毎年6月に慰霊祭を行い、死者の名前を刻んだ純白の慰霊碑を建てた。1960年には同窓会を財団法人化し、1968年には同窓会館を建てるなど、組織としての基盤も固めていった。慰霊碑の建立・慰霊祭の継続実施といった活動は、積徳同窓会や白梅同窓会など、母校が廃校となり学徒隊生存者を最後のメンバーとする他の同窓会の活動と、おおきく変わるものではない。差異があるとすれば、それは、ひめゆり学徒隊が小説や映画などを通して広く認知され、ひめゆりの塔が突出した戦跡観光地のひとつになっていたこと、戦前のふたつの同窓会をひとつにした新たな同窓会を戦後に結成し、かつこれを財団法人化したこと、市場の火事が契機となって同窓会館という母校に代わる拠点を戦後21年して遅れて得たこと、である。そして、戦死者の33年忌を過ぎた1980年代になって、ひめゆり同窓会は、他の学徒隊生存者の同窓会と決定的に異なる、そしておよそ全国のどの学校の同窓会もなしえない、独自の活動へと踏み出した。すなわち、平和を祈念する資料館の建設と運営である。これが第2点である。1980年に各地で「あれから35年 ひめゆりの乙女たち展」が催行され、これが社会におおきな反響を呼んだ。この展覧会の成功、そして残された展示資料の取り扱い問題をきっかけに、母校再建の夢を断念したひめゆり同窓会は、資料館建設というまったく未知のおおきな目標を設定し、これに向かって邁進することとなった。

ただし、振り返ってみれば、その経緯は予期せざる事態や意図せざる結果の連続であった。これが第3点である。おもな点を再確認しておこう。①そもそも同窓会メンバー、とくに学徒隊生存者は、ひめゆりの塔とそこにあるガマにおおくの観光者が訪れることに強い違和感をもっていた。この場所の俗化・観光地化を押しとどめ、霊域として保持することを望んでいたのである。それが、1980年の展覧会の反響を前にして、おおくの人々に戦争の悲劇と平和の尊さを知らしめることこそ、亡くなった学友たちに報いる自分たち生存者の使命であると、認識を転換させたのである。②資料館建設が議論の俎上に載った当初、同窓会本部は、奨学基金の設立途上にあったことや財政・経営上の懸念から、建設にはむしろ否定的であった。同窓会幹部の会合において、仮に採決が行われていれば、資料館建設案は画餅に終わっていた可能性もあった。ところが、資料館建設に積極的な東京支部と学徒隊生存者の意向が同窓会長らの支持を受けて前面に立ちあらわれ、この奨学基金の設立作業と並行する時期の1982年の同窓会総会において、資料館建設が満場一致で承認されるにいたったのである。③同窓会側が漠然ともっていた資料館のイメージを、プロデューサーに起用したX氏が塗り替え、かつそこに具体的な肉付けを施していった。同窓会側は遺品の展示を中心とした比較的ちいさな資料館をイメージしていたが、これは、一定の広さをもち、おおくの来館者がバスで訪れる施設という案へと変貌した。その場合、民間の組織が運営する以上、赤字は許されない。X氏は具体的な数字でもって館の収支バランスの目安を示した。展示品がすくないという問題にたいしては、学徒隊生存者を資料委員会へと組織化し、戦後40年立ち入ることがなかった病院壕（伊原第三外科壕・伊原第一外科壕・沖縄陸軍病院壕）で収集した実物資料と生存者から新たに得た証言資料、そしてウイスイコーの際の遺影写真を組み合わせ、ひめゆりのガマ（伊原第三外科壕）それ自体を展示資料とする発想——結果的に実現しなかったが——によってのりこえようとした。開館後に制度化される、学徒隊生存者による語りも、当初は計画になかったものである。付言すれば、学徒隊生存者にとっては、開館後も引き続き超多忙な日々が待っていたという点も、当初の見込みとは違っていた。④建設に向けた具体的作業が始まると、行政との間に見解の対立が明確化し、折り合いをつけていく必要が生じた。行政側は、ひめゆりの塔周辺を公的に管理されるべき霊域とみなし、民間の非営利組織である同窓会による資料館建設を当初は認めようとしなかった。その理由づけは、同窓会・期成会には納得しがたいものであった。そこにガマ展示問題が発生し、いよいよ行政側と同窓会・期成会側との見解の対立は深まった。沖縄社会の世論も、このときは同窓会側を支持する立場ばかりではなかった。しかし、県側が資料館の建設を許可するがガマの実物展示は認めないとしたことを受け、同窓会・期成会側は、ここで妥協することが資料館建設には必要と判断し、ガマのレプリカを展示に組み込みつつ、工事着工に漕ぎ着けたのであった。この行政との折衝過程において、同窓会側は、神聖な場所に来ることで戦争の悲劇と平和の大切さをおおくの人々に体験的に知ってもらうことが重要であるという認識を固めていった。⑤開館後の資料館の順調な運営を受けて、同窓会は、事後的に、この資料館の未来にわたる維持存続こそ、生存者としての使命であるとあらためて認識した。ここから、財団法人としての同窓会は、次世代の担い手へと資料館の運営を受け渡すため、組織強化と展示の改編に取り組んだ。

このように、ひめゆり同窓会の行ってきた活動は、その時点では予想も意図もしていなかった転換の連続にほかならなかった。すくなくとも、戦後の同窓会設立当時には資料館の建設と経営という目標は視野に入っておらず、また、資料館の設立当時には同窓会メンバーなきあとの資料館の存続という課題に明確な回答を持ち合わせてはいなかった。そして、それらの転換を導いた根本にあったのが、霊域観の転換であった。当初、同窓会は、ひめゆりの塔とガマの所在する場所を慰霊の地として守ることに取り組んでおり、その場所がすでに観光地化していることに痛惜の念や忸怩

たる思いを抱いていた。しかし、同窓会は、霊域であるからこそ、それを一般の人々に開放して事実を知らしめることが重要であると捉え直すようになったのである。とりわけ、その認識転換は、gamma展示問題に取り組む中で確定的なものとなった。ここにあるのは、霊域維持と観光地化を相反するものとみなす観点から、両者を相伴うものとみなす観点への跳躍である。この、遺族ではない来訪者とともに死者への思いと平和への祈念を分かち合いたいという心情こそ、ひめゆり同窓会をして資料館の設立・運営へと駆動した原理にほかならない。これが第4点である。

そして、2010年代に入って、ひめゆり同窓会は、同窓会としての終焉を迎えるのではなく、公益財団法人化し、単なる同窓会をこえた資料館母体組織へと脱皮あるいは超越するにいたった。これも、同窓会としては、およそ当初の想定範囲外にある出来事であった。では、この時限結社からの超越をもたらすことになった同窓会による資料館の建設と運営には、いかなる要因や背景が絡み合っていたのであろうか。これが第5点である。

それを、やや単純化したかたちではあるが、抽出してみよう。①学徒隊生存者が観光客受け入れに否定的な認識から肯定的・積極的な認識へと転換した背景ないし先行要件として、メディア化された「ひめゆりの塔」のイメージの社会的浸透があった。学徒隊生存者は殉国美談のイメージに強い違和感を覚えていたが、このイメージが人口に膾炙していたからこそ、資料館建設のきっかけをつくる新聞社主催の展覧会が開催されたのであり、それが沖縄のみならず全国各地でおおきな反響を呼んだのである。同窓会も、「[ひめゆりの] 少女達の悲劇は全国に語り継がれ知名度も高」という点を自負していたのであり（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 275）、それを踏まえて資料館建設というおおいなる目的へと向かったといえる。他の学徒隊生存者の同窓会組織は、そうした強烈なイメージも、ひめゆりの塔に匹敵する公知のシンボルも、世論の喚起力も、持ち合わせてはなかった。②戦前の学校組織にあった、教員と生徒および上級生と下級生との間の上意下達的なイニシアティブが、一定の効果をもったと考えられる。さまざまな意見が自由闊達に議論されるという雰囲気になかったわけではないが、同窓会長の「つくりましょう」という発言が契機となって建設提案が満場一致で可決されたことや、節々に仲宗根が果たした役割などに、こうしたイニシアティブのあらわれを看取することができる。③資料館建設へと踏み出すことができた別の要因として、同窓会の財政的安定性があった。これは、同窓会館の貸店舗による収入を指すのではない。ひめゆり同窓会という組織自体が潤沢な資金をもっていたのではない。むしろ、①に示したイメージの社会的浸透のおかげで、資料館建設前に寄付や募金といった手段によって土地購入や建設のための資金を調達できたこと、資料館開館後に予想を超える入館者数によって安定的な運営基盤を構築できたこと、を指す。卓越した知名度という文化資本が、経済上の資本に転化されえたのである。④加えてもうひとつの重要な資本があった。豊かな人的資源である。ひめゆり同窓会のメンバーの中には、東京・大阪・九州・沖縄において有力者とのネットワークをもつ者もいた。沖縄社会で尊敬を集める教員もおおく、公益のために粉骨砕身働くという心性をもつ者もおおかった¹³。政治的な立場や経済的な利害とは一線を画し、あくまで恒久平和の追求を掲げる理念の下に、浄財を広く募って目標以上の資金を集めることができたのは、ひめゆりの塔と戦時の学徒隊がイメージや記号の次元で人々にアピールしうる象徴的価値をもつとともに、ひめゆり同窓会が人的資源に、そして同窓会長や支部長らのカリスマにも、恵まれていたからである。⑤経営手

¹³ 1945年に民間の人々向けに開設された米軍政府病院では、ひめゆり学徒隊生存者20名が、自決した学友たちへの思いを胸に、自ら志願して精神科病棟患者の世話を引き受けた。その献身的な働きぶりは、周囲を感動させるものであったという（小椋 2015: 43）。

腕のあるプロデューサーと学徒隊生存者の心血を注いだ努力が有機的に結び合ったことも、重要な要因である。社会に広まったひめゆりのイメージに合致し、かつそのイメージの内奥に向けて人々の心を深くゆきぶる内容を、資料館の展示はもちえた。とりわけ、証言員の肉声によって沖縄戦を追体験するという情報提供のあり方は、ひめゆり平和祈念資料館ならではのものであり、それは県の平和祈念資料館をはじめ、他の同様の博物館・資料館の追随を許さなかった。⑥本章脚注9でも触れた、好機の到来という点もある。1972年の沖縄復帰により、沖縄と県外とくに東京との間の同窓会関係者の行き来やコミュニケーションは厚みを増した。戦後33年忌を過ぎて、高齢になったとはいえ、逆に子育てからはある程度解放され、場合によっては職を捨ててまで、資料館建設に邁進するマンパワーを結集することもできた。戦争の記憶は、米軍のプレゼンスがなお継続したこともあり、風化することなく、他方で、忘れることのできない苦しい記憶をもちながらも、時間がたったことでそれと向かい合おうという気持ちになることもできた。資料館建設は、戦後数十年の時間経過を必要とした、と私は考える。そして、当時バブル期にあった好調な日本経済が募金や寄付を後押しした点も、時機を得ためぐりあわせであった。⑦最後に、復帰後の沖縄の観光地としての飛躍的な発展という点も欠かせない。内地からおおくの観光者、とくに修学旅行生がやってくることで、資料館は安定的な財政を維持することができ、2度の展示リニューアルや研究所設立を含む、恒久平和の念願という資料館設立の趣旨を今日までまっとうすることができた。

こういったさまざまな要因のより糸——イメージの社会的浸透、上意下達の組織内イニシアティブ、文化資本の経済資本化、人的資源の豊かさ、プロデューサーのアイデアとその実行、沖縄の観光発展に伴う来館者の増加、そしてそれらを生かす好機の到来——が、意図せざるかたちで相互に結びつくことによって、資料館の設立と、その未来を視野に入れた運営とが、順調に果たされたのであった。

以上が本章の記述の論点整理である。では、これを踏まえて、同窓会がこうした霊域の観光資源化をいかに捉えていたのかという点について、あらためて考察することにしよう。

第4点として指摘したように、ひめゆり同窓会が資料館の設立・運営に邁進するにいたる過程の根幹には、慰霊と観光を相容れないものとみなす認識から、慰霊と観光を相伴いうるものとみなす認識への転換があった。では、同窓会関係者に「霊域の観光資源化」という認識はあったのであろうか。

彼女たちが戦争と平和を主題としたある種の学習観光を意図して資料館を建設した、ということはいえるであろう。それは、彼女たちの語彙から離れたところで単純化するというならば、霊域の観光資源化であり、この場所のさらなる観光地化促進ではある。ただし、そう捉える場合、重要なのは、この理解が観光資源化と霊域性の確保とが二律背反ではなく両立可能であるという前提の上にあることである。彼女たちは、霊域を俗なる観光地に転換するという意味での霊域の観光地化や観光資源化には、一貫して否定的であった。目指したのは、霊域を霊域のまま大切に守りながら、その霊域ゆえの強いメッセージ性に訴えつつ、恒久平和を念願する思いを人々に広く伝え共有することであった。第3節のガマ展示問題の箇所を確認したように、ひめゆりのガマや塔の所在場所が有する霊域性ないし神聖性は、死者の無念とともにあるものにほかならず、神のごとき超越的かつ秘匿されるべきものと異なり、逆に人々と分かち合うべきものとして捉えられた。霊域であるがゆえに、戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えるため、ここを他者に開示し共有しなければならない、というのが、さまざまな経緯を経る中で同窓会がたどり着いた認識であった。

しかし、観光資源化と霊域性確保を両立可能とする同窓会の認識は、かならずしも十分語られず、当時の社会の中にも十分共有されなかったように思われる。遺族の一部や沖縄の世論は、霊域

確保か観光地化かという二者択一的な認識枠組みの中で資料館建設を捉えようとした。おそらく、その背景にあるのは、海洋博後の1980年代当時の沖縄が楽園観光地化をひたすら追求する社会過程にあったことである。拙論で論じたように、戦後の沖縄観光は、地上戦の戦死者を弔う沖縄内外の人々を主要なゲストとする慰霊観光にほぼ特化するかたちで再開されたが、その後、とりわけ日本復帰後、観光と慰霊とは乖離していき、前者は沖縄島周辺離島や先島地方をも取り込んだ楽園観光地化の全面化の過程へと帰着していったのである（吉田 2020a: 303-357; cf. 神田 2012; 北村 2009; 桜澤 2021; 多田 2004, 2008）。

ひめゆり同窓会は、復帰後の沖縄における観光と慰霊との分離という支配的な趨勢に抗するかのよう、慰霊と観光とをふたたびひとつにする実践を展開しようとした。彼女たちの活動は、マスコミでは比較のおおきくまた継続的に取り上げられた。しかし、それは、観光の文脈においてではなく、戦争や平和を主題化する文脈においてであった。そのこと自体、沖縄社会における観光のまなざしと慰霊のまなざしとの分離を物語っている。そして、同窓会自身もそうしたまなざしのあり方に無縁ではなかった。同窓会の活動は、非営利目的の観光事業として、あるいは観光のみに還元できない社会公共事業として、積極的・肯定的に捉えうるものであったが、「もうきじく」と評価されることへの恐れが示すように、彼女たちも、観光＝営利追求と捉えるまなざしをもち、自らの活動を非観光＝非営利追求の側にあるべきものと位置づけ、自己観察していた。ガマ展示問題や遺影の展示も、戦争を知らない世代に戦争の悲惨さをいかに伝えつつ死者を慮るのかという、観光と慰霊を結び合わせる論理・倫理の枠組みではなく、墓に相当する霊域に遺族でない人々が踏み込むことを是とするのか、死者を俗なる観光ビジネスに利用することは許されるのかといった、観光と慰霊とをたがいに相容れないものと捉える論理の枠組みにおいてもっぱら捉えられ、意見が交わされたのであり、ひめゆり側もこうした枠組みに乗るかたちで妥協の道を探ったのであった。

しかし、あらためて振り返れば、資料館を建設し、そこにガマ展示を組み込もうとしたひめゆり同窓会の意図は、死者の靈魂を祀り弔うという宗教行為としての慰霊と、宗教色を希薄化させた（あるいは特定の宗教色を脱した）広義の慰霊、そして哀悼、鎮魂、平和祈念などを境目なくつなぎ合わせ、幅広い人々とともに分かち合おうとすることにこそあった。別言すれば、それは、死者祭祀たる宗教的慰霊から離床した創発的で統合的な意味の次元を見出しつつ、これを観光へと媒介する試みであった。だが、そうした潜在的な意図は明確に言語化されず、社会に広く共有もされなかった。また、仮にそれが明確に語られたとしても、当時の社会的文脈においてはその意味を縮減されて捉えられ、論争や軋轢を生んでいたかもしれない。さらに、同窓会は、慰霊祭の開催にみられるように、沖縄の宗教に深く埋め込まれた性格をも抱えていた。ただ、沖縄が国内観光者ばかりでなく国外からの観光者により開かれていくであろう未来に鑑みれば、こうした創発的な意味をより明確に言語化しメッセージとして発信していくことが、資料館がもつ普遍的な意義をさらに展開することにつながるように思われる。私は、それこそが研究所を設置した資料館とその担い手たちに託された今後の使命なのであると考える。

*

ひめゆり平和祈念資料館は、戦争の悲惨な実態を直接来訪者に語り見せ、疑似的に追体験させる上でのすぐれた技法を提起してきた。第1節で触れたアガンベンの議論をふたたび参照したい。アガンベンは、『言語活動と死』（邦訳書名は『言葉と死』）において、言葉で語りえない次元にある「声」が存在の否定性や無や死を表現し意志するその一体的あり方を〈死の声〉と名づけ、人間の歴史や倫理の根拠をそうした〈死の声〉や無言の伝達という契機に見出す立場から、「現存在」を

規定し直した¹⁴ (Agamben 2009(1982): 15–26, 72, 139, 146–147, 192–198, 200, 202, 236–241; Blanchot 1997(1983); Delanty 2006(2003): 189; Nancy 2001(1999); 西谷 1997: 240–244)。

ひめゆりを訪れた人々が向かい合うのは、学徒隊の死者そして生存者の、言葉で語りえない次元にあるこの〈死の声〉である。すべての来訪者にそのメッセージがたやすく伝わるものでもないかもしれない。しかし、ひめゆりの塔、その脇に口を開けてたたずむガマ、それらの後方にあるひめゆり平和祈念資料館は、戦争によって生きることができなかった学友たちと、戦争の臨死体験を経て生きることになった生存者との、紙一重の実存を現在までとどめおくとともに、そこから平和への願いをさまざまな属性をもつ人々と共有しようとする、宗教的であり世俗的である観光のトポスであると理解できる。そこは、ある者にとって死者を弔う宗教そのものに関わる霊域であり、ある者にとって慰霊・哀悼・鎮魂・平和希求といった広い意味での宗教「的」な営為や心情を喚起する場であり、ある者にとって戦争と平和について学習する場であり、ある者にとってみやげ物屋や花売りに取り囲まれた俗なる観光地であり、ある者にとってある種のダークツーリズムの目的地であり (cf. 市野澤 2021: 97)、おなじ人にとっても、ときに異なる意味合いをもちうる——たとえば、ひめゆり関係者にとってそうであったように——。この場所は、ホストやゲストのさまざまな主体にとって異なる意味の様相を重層的にまといつつ、それら多様な意味の間を行き来しうる可能性を底辺で保っている¹⁵。

ここであらためて確認しておきたいのは、霊域であることと観光地であることとは決して二者択一でも相反するものでもないという認識を、ひめゆり同窓会が社会に問題提起し行動した、といえることである。これを含む多義的意味の広がりの中に、観光地や観光の資源というものを、そしてゲスト（観光者）やホストといった主体を、あらためて投げ返して捉えることの重要性を、同窓会の活動は教えてくれる。

序章および第 I 章の議論との関連で、最後にひとこと述べておきたい。本章が取り上げたのは、人々の相互主観的な意味の次元において観光が観光でないものと溶け合う具体的なあり方を示す事例である。ただし、それは、ラッシュとアリーという「観光の終焉」とはまったく異なる事態を指すものである。ひめゆりの塔・ガマ・資料館のあるこの場所は、ひとつの観光地であるとともに、遺族や同窓会関係者あるいは彼女たちに共感する人々にとっては、観光地ではなくむしろ霊域である。この事例は、そうした多重の意味の併存を、あるいは圧縮していえば、観光地であるとともに観光地ではないというこの共存性ないし共振性を、観光論が主題化すべきことを示している。そして、この共存性や共振性は、まったくもって別のかたちではあるが、第 II 章で取り上げた世界自然遺産の事例——本来、人の介入をできるだけ避け保護されるべき価値を有する場所であるにもかかわらず／それゆえに、観光地となる——も示していたところである。

¹⁴ ハイデガーにとって、現存在は、やがて訪れるであろう死を理解しそれを自ら担うことで、自らの存在の全体を真に把握することになる。「死への先駆け」という果敢こそ、現存在の本来的な生き方、すなわち実存なのである (木田 1983, 2000: 39–44, 65–76; 高田 2014(1996): 200–203, 225–236; 竹田 2017(1995): 123–143)。しかし、この現存在分析を、ひめゆり学徒隊生存者やその関係者に当てはめることはできない。なぜなら、彼女たちにとって、死は将来訪れる可能性ではなく、忘れぬ過去にあった体験であって、その一種の臨死体験といえるものこそ、その後の、とくに資料館建設に向かい合ってから、生の再出発点となるものであったからである。それは、おおかれすくなかれ、地上戦を体験した沖縄の人々に、またアウシュヴィッツの生存者らにも、共有されるものであろう。ハイデガーの一般化された現存在分析は、本章で論及した生存者たちの理解に適合的ではない。アガンベンは、そのことを西欧の別の事例や視点に照らし論じたのだといえる。

¹⁵ ひめゆりの塔とガマを世俗的ではない宗教または宗教的な観光スポット、平和祈念資料館を世俗的な観光施設として受け止める捉え方もあるかもしれない。しかし、資料館の第 4 展示室を霊域に近いものと感じる者もいるであろう。塔・ガマ・資料館は一体となって、これらが存立する場所を、霊域でもあり、宗教「的」な場所でもあり、俗なる観光地でもあるものとしていると、私は捉えている。

以上、本章では、観光の外部におかれていた霊域を観光の内部へと取り込んだひめゆり同窓会の営みを記述的に理解しようとし、そこから、意味論の次元における観光とその外部との共存性ないし共振性という点を導き出すことができた。では、次に、そうした観光の内部と外部との溶解について、観光の主体をめぐって検討することにしたい、これが、本研究で取り上げる最後の民族誌的トピックとなる。